

【前 期 日 程】

小 論 文

専 攻 等	問題区分	頁	解答用紙	下書用紙
学校教育教員養成課程教科教育専攻 社会科教育コース	問題E	1～4	2枚	2枚
学校教育教員養成課程教科教育専攻 家政教育コース	問題F	5～8	2枚	2枚
学校教育教員養成課程特別支援教育専攻	問題G	9～13	2枚	2枚
養護教諭養成課程	問題H	14～17	2枚	2枚
教育協働学科教育コミュニティ支援専攻 心理科学コース	問題I	18～22	2枚	2枚
教育協働学科グローバル教育専攻 日本語教育コース	問題J	23～33	3枚	2枚

注 意

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見ないこと。
2. 上記の表で、受験する専攻等に対応する問題を確認し、解答すること。
 なお、表紙及び白紙等を除いて33頁である。もし不備があれば、試験開始の合図があった後、直ちに申し出ること。
3. 解答用紙・下書用紙の枚数は上記の表のとおりである。解答用紙が複数枚ある場合は、すべてに受験番号・氏名・問題区分及び専攻等を記入すること。
 なお、解答用紙は、縦書き・横書き共通用紙800字詰又は無地となっているので、各問題で指示した字数及び縦書き・横書きの別を確認して解答すること。
4. 試験終了後、この問題冊子及び下書用紙は、持ち帰ること。

問 題 E

次の設問1、設問2の両方に答えなさい。

なお、解答にあたっては、設問ごとに一枚ずつ解答用紙を用い、該当する設問番号を○で囲むこと。

設問 1 次の文章を読み、「社会問題の個人化」とはどのようなことなのかを具体例を挙げながら説明しなさい。(横書き 600 字以上、800 字以内)

現代においてしばしば語られるのが「社会問題の個人化」です。伝統的な社会には、地域や身分ごとに相互扶助の仕組みがありました。病気や怪我^{けが}で仕事をできなくなった場合にどうするか。親を失った子どもたちをどのように育てていくか。決して十分とはいえないものの、それなりの仕組みが社会的に存在しました。もちろん、伝統的な相互扶助には独自の規制や拘束がともない、そのような規制や拘束を逸脱する個人は、保護の対象外になったことはいうまでもありません。

近代になって、このような伝統的な仕組みは解体していきます。そして、伝統的な相互扶助に代わって国家が教育や社会保障の制度を通じて、人々をさまざまなリスクから守ることに乗り出します。このことは個人を伝統的な社会的結びつきから解放し、自らの意志で職業を選択することを可能にしました。伝統的な家族関係、近隣との結びつき、身分や階級の枠を超えて、一人の人間が個人として生きていくことを可能にしたのが、福祉国家、あるいは近代国家一般の大きな役割でした。

とはいえ、このことは個人に独特なプレッシャーを与えることにつながります。たとえば教育です。現在では、人は親や自らの階層を基準とするのではなく、学校教育制度を通じて自分の運命を決定することになりました。「リスク社会論」で知られるドイツの社会学者のウルリッヒ・ベックは、教育の達成が試験という「個人化された針の穴」を通じてのみ測られるようになったことを強調しています。

結果として、個人はますます自己をみつめる必要が大きくなっています。リスクとチャンスに満ちた労働市場で、個人は自らのライフコースと運命を決定しなけれ

ばなりません。受験の失敗や失業といった問題は、あたかも個人の人生史(パーソナル・ヒストリー)の問題としてクローズアップされます。

いうまでもなく、進学率や失業率は社会によって大きな影響を受けています。その上昇や下降は、一人ひとりの個人の努力というよりは、社会における多様な要因の複合的な所産として決定されます。ところが、個人にとってみれば、そのような結果は、純粹に個人の成功・失敗の問題のようにみえるのです。

かつてであれば、失業は、その個人の年齢や学歴、性別や居住地域によってある程度説明することができました。たとえば「ある年齢のある学歴層に顕著に多くの失業者が出ている」ということも可能でした。これに対し、現在では問題が複雑さを増しています。所属する集団や階層のみならず、その人の職歴や家族関係、心理面での個人史などを考慮に入れないと、ある人がなぜ失業状態におちいったか、具体的には説明できないことが多いのです。

親子関係のトラブル、受験の失敗、離婚、メンタル面の問題……これらはあたかもその個人に特有の事柄にみえます。統計的にいえば一定の社会的属性を有する人々が失業という共通のリスクにさらされているとしても、一人ひとりにとっては自分だけの問題にみえるのです。このことをフランスの社会学者ピエール・ロザンヴァロンは「集団・階層」から「個別の状況や個人史」への「社会学的革命」とよんでいます。

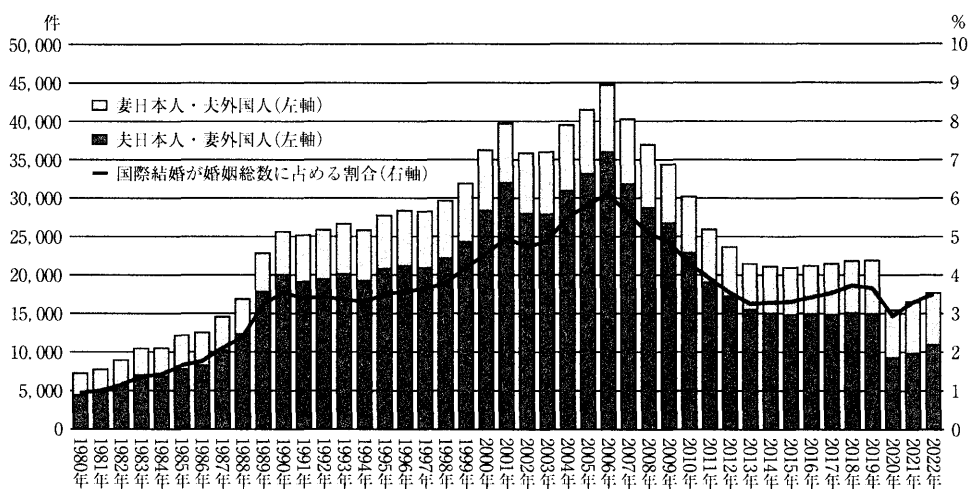
この「社会学的革命」により、社会問題はあたかも個人化しているようにみえるようになりました。本来、社会的な背景をもっており、個人にすべて帰責できない事柄までが、個人の問題のように現れたのです。

逆に、かつてであれば、社会問題を解決するにあたって、同じ境遇にある労働者の団結をめざす労働運動も可能でしたが、今日では労働者といってもおよそ一枚岩ではありません。社会問題の個人化が進むことで、問題解決は難しくなるばかりです。

この「社会問題の個人化」こそが、〈私たち〉の問題を、〈私たち〉の力で解決する民主主義を困難にしているように思えてなりません。

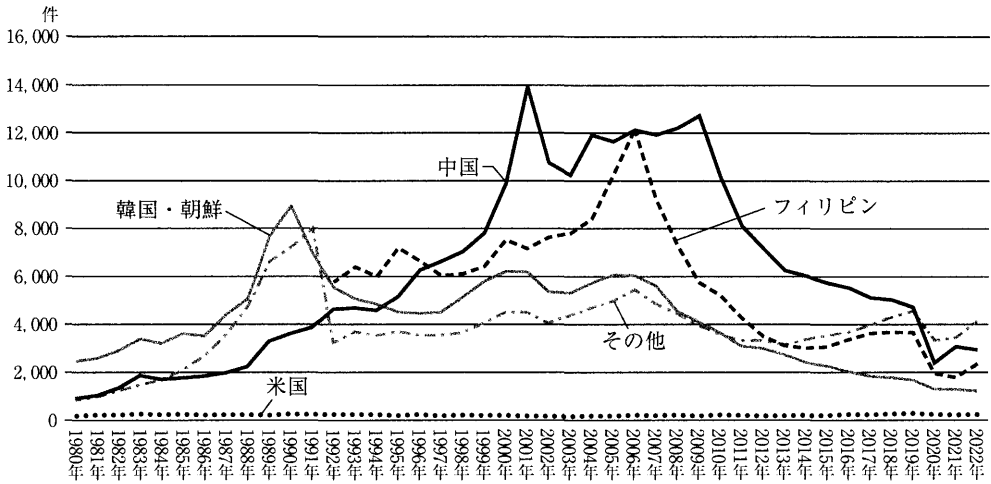
(宇野重規「第6章 私」、井手英策・宇野重規・坂井豊貴・松沢裕作『大人のための社会科 未来を語るために』有斐閣、2017年、一部改変)

設問 2 以下の図1～3から1980年以降の日本における国際結婚の動向を読み取り、3つ以上5つ以下の時期に区分しなさい。そして、それぞれの時期の特徴に触れながら、国際結婚がどのように変化してきたのか述べなさい。（横書き600字以上、800字以内）



出所：厚生労働省「人口動態統計」より作成。

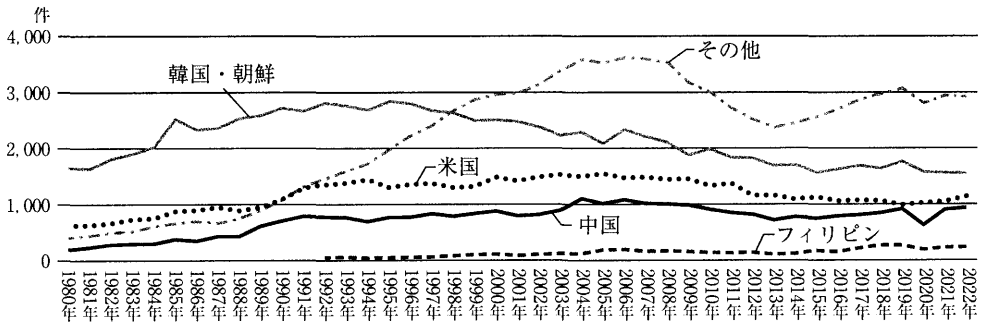
図1 国際結婚件数と割合の推移



注：フィリピンについては、1991年までは「その他」に含まれる。

出所：厚生労働省「人口動態統計」より作成。

図2 妻の国籍別 夫が日本人・妻が外国人の婚姻件数の推移



注：フィリピンについては、1991年までは「その他」に含まれる。

出所：厚生労働省「人口動態統計」より作成。

図3 夫の国籍別 妻が日本人・夫が外国人の婚姻件数の推移

問 題 F

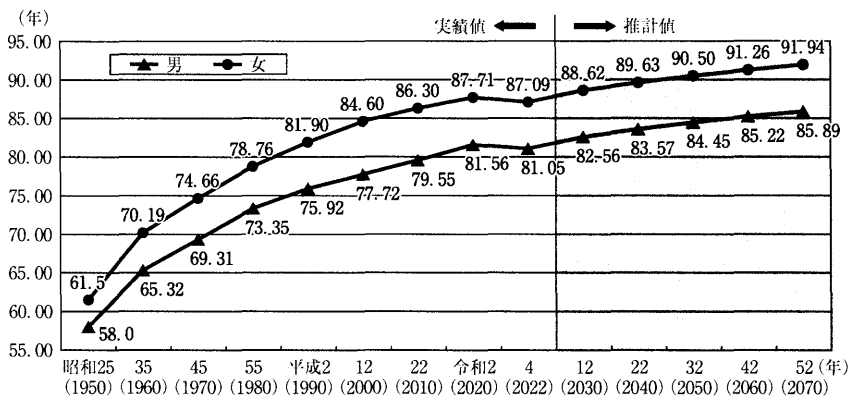
次の設問 1、設問 2 の両方に答えなさい。

なお、解答用紙は設問ごとに 1 枚とする。

解答用紙は設問番号を○で囲み、左欄外には、問番号を問 1、問 2 などとして明記すること。

設問 1 我が国の高齢化の状況および高齢者を取り巻く課題について、下記の問いに答えなさい。

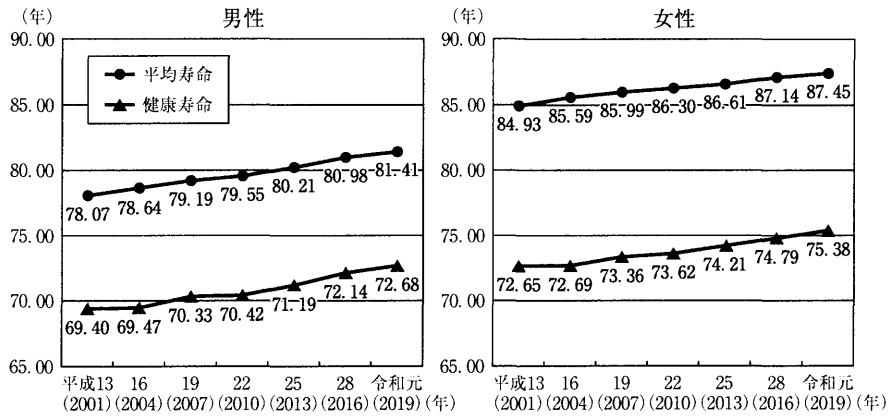
問 1 図 1、図 2 から読み取れる高齢者の寿命の特徴について述べなさい(横書き 200 字以上 300 字以内)。



資料：1950年、2022年は厚生労働省「簡易生命表」、1960年から2020年までは厚生労働省「完全生命表」、2030年以降は、国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（令和5年推計）」の死亡中位仮定による推計結果

(注) 1970年以前は沖縄県を除く値である。0歳時点における平均余命が「平均寿命」である。

図 1 平均寿命の推移と将来設計(内閣府『令和5年版 高齢社会白書』)



資料：平均寿命：平成13・16・19・25・28年・令和元は、厚生労働省「簡易生命表」、平成22年は「完全生命表」

健康寿命：厚生労働省「第16回健康日本21(第二次)推進専門委員会資料」

図2 健康寿命と平均寿命の推移(内閣府『令和5年版 高齢社会白書』)

問2 高齢化社会と高齢社会の違いを説明し、高齢社会の高齢者介護の課題について、あなたの考えを述べなさい(横書き 200字以上 300字以内)。

設問 2 住宅の結露について問いに答えなさい。屋内外の状況は、問1、2共通です。

屋内外の状況

時季、時間：1月の午後5時

天気：晴れ

外気温：4℃

外気の水蒸気密度：3 g/m³

室内温度：26℃(暖房を使用しています。)

室内湿度*：80% Rh(夕食の煮込み調理を始めています。)

キッチンの窓：左右にスライド開閉出来る窓

ガラスは二重ガラス等ではない普通のもの

窓ガラスは外気と同じ温度になり、結露しています。

*湿度：相対湿度ともいう。大気中に実際に含まれている水蒸気の量と、その大気
がその温度で含み得る最大限の水蒸気の量との比を百分率で表したものの。

問 1 図1の中の数値を利用して窓に結露が起こる仕組みを説明しなさい。更に、
住宅の窓が結露する事が長期間続くと起こる弊害について自分の考えを述べな
さい(横書き 200字以上 300字以内)。

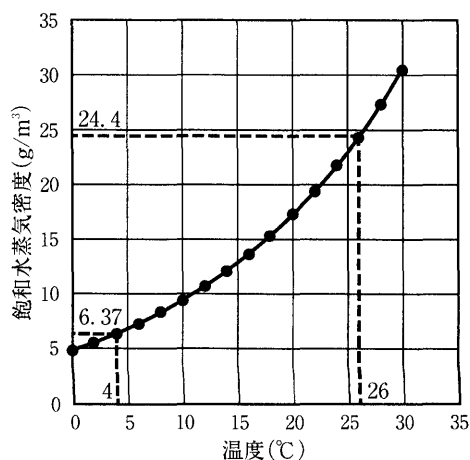


図1 気温と飽和水蒸気密度の関係

小倉義光『一般気象学(第2版)』東京大学出版会(2003)より作成

問 2 図 2～4 に示すキッチンの窓の結露を少しでも抑え、問 1 で答えたような弊害が起こらないようにする為に、あなたはどのような対策をしますか。下記のキーワードを全て使用して、自分の考えを説明しなさい。キーワードは何度も使用したり、語尾を変えたりしても構いません。明るさ、防犯上の理由等、結露に関係のない問題は無視して考えなさい(横書き 400 字以上 500 字以内)。

キーワード：開ける、閉める、窓、湿度

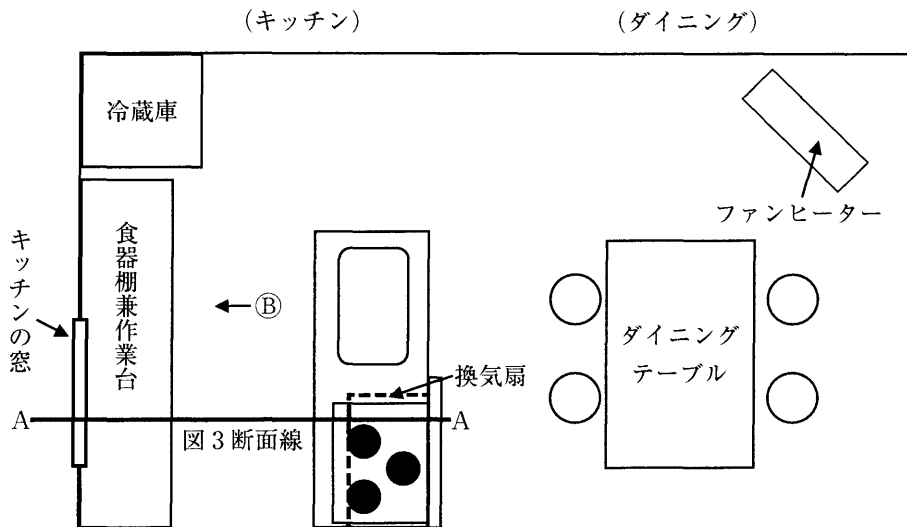


図 2 キッチンの窓の場所(平面図)

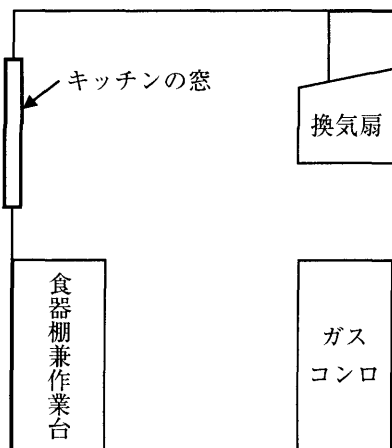


図 3 図 2 の A-A 断面図

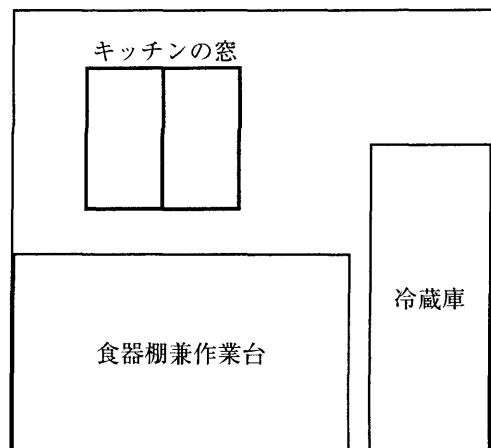


図 4 窓側立面図
(B地点より矢印の方向を見た図)

問 題 G

次の設問1、設問2の両方に答えなさい。

なお、解答にあたっては、設問ごとに一枚ずつ解答用紙を用い、該当する設問番号を○で囲むこと。

設問1 次の文章を読み、要点をまとめたうえで、「主体的・対話的で深い学び」となるために、子どもたちにはどのような活動が必要であるか、あなたの考えを述べなさい(600字以上800字以内・横書き)。

主体的な学びが大切だとして、アクティブ・ラーニングが推奨され、さまざまな事例が報告されている。だが、その一方で、「活動あって学びなし」といった批判も多く、改めて「深い学び」が強調されるようになった。

主体的で深い学びやその手法としてのアクティブ・ラーニングに関する事例報告や理念の説明を読んでいて、いくつか疑問に思うことがある。とくに、アクティブ・ラーニングを主体的・対話的で深い学びのための有効な方法と位置づけ、グループ活動や他者との議論が推奨されていることには違和感を覚えざるを得ない。

第1に、「深く考える」ような学びが大事だということが、なぜすぐに実践や観察可能な活動に結びつけられてしまうのか、ということだ。

実践に結びつく授業を全否定するわけではないが、授業の場では深く考えることに徹して、実践は授業から切り離してもよいのではないか。学びをすべて実践に結びつけようとすることで、かえって学びが浅くなってしまふことが懸念される。

生徒・学生としての学びの段階では、学びの世界に思いきり浸ることが大切である。学ぶ喜びを感じることができれば、学びが学びを呼び、どんどん深まっていく。実用的な価値を性急に追求せずに、純粹に学ぶ喜びに浸ることこそが深い学びにつながっていくのだろう。

それができていれば、将来、必要に応じて実践に活かすこともできるようになるはずである。

第2に、「深い学び」がなぜ「対話的」でなければならないのか、ということだ。

中央教育審議会でも、主体的・対話的で深い学びのためにはアクティブ・ラーニングの導入が必要だといった議論が行われているようだが、なぜ「対話的であること」が主体的で深い学びの前提になっているのか――。

将来、多様な人々と協働できるようにならないといけないから、ということのようだが、では、いろいろな人と気持ちよく協働して働いている今の大人たちは、「対話的」に学んできた人たちなのだろうか。おそらくそんなことはないだろう。

さらには、個人が自己拡張の原理で動く社会では他者との協働を教育する必要があるかもしれないが、日本のように個人が絶えず他者に配慮しながら自己規制して行動する社会では、あえて教育のなかに他者との協働を意識的に組み込む必要はない。

私は、欧米の文化を「自己中心の文化」、日本の文化を「間柄の文化」と特徴づけ、対比させている。

「自己中心の文化」とは、自分が思うことを自由に主張すればよい、ある事柄を持ち出すかどうか、ある行動を取るかどうかは、自分の立場を基準に判断すればよい、とする文化のことである。

そこでは、常に自分自身の気持ちや考えに従って判断することになる。

積極的な自己主張をよしとする欧米の文化は、まさに「自己中心の文化」と言える。そのような文化のもとで自己形成してきた欧米人の自己は、個として独立しており、他者から切り離されている。

一方、「間柄の文化」とは、一方的な自己主張で人を困らせたり嫌な思いにさせたりしてはいけない、ある事柄を持ち出すかどうか、ある行動を取るかどうかは、相手の気持ちや立場に配慮して判断すべき、とする文化のことである。

そこでは、常に相手の気持ちや考えに配慮しながら言動を行うことになる。

勝手な自己主張を控え、思いやりを持つべきとする日本の文化は、まさに「間柄の文化」と言える。そのような文化のもとで自己形成してきた日本人の自己は、個として閉じておらず、他者に対して開かれている。

動機づけの領域でも、「だれかのため」ということが強いモチベーションになるのが日本人の特徴とされるが、「間柄の文化」に生まれ育つ日本人の心は、なにも

対話的な学びにこだわらなくても、もともと他者に対して開かれているのである。なんでもアメリカ流を追従するのではなく、文化的背景を考慮すべきだろう。

第3に、個性が大切と言いながら、なぜ一律にグループ学習や他者との議論を授業の軸に据えようとするのか、ということだ。

人にはそれぞれ個性がある。たとえば、内向的か外向的かということにも遺伝要因が強く関係していることがわかってきている。学び方にも、社会貢献の仕方にも、個性に応じた多様性が認められるべきだろう。

みんなとしゃべりながら学ぶのに向いている子もいれば、みんなといると気が散って集中できず一人で学ぶのに向いている子もいる。他者との協同で社会に貢献する大人もいれば、個人として仕事と向き合うことで社会に貢献する大人もいる。

それにもかかわらず、そうした個性の違いを考慮せずに、なぜ、だれもがグループ学習や他者との議論を通して学んでいかないといけない、ということになるのか。

さらに言えば、個性の違いということとは別に、そのような学習形態ばかりを重視していたら、子どもたちのなかに、学びという孤独な内的活動に真剣に向き合うような心の構えが形成されない。

第4に、「対話的」学びの大切さに関しても、「対話的」学びというのが、なぜ同級生や教師との対話というような外的対話の形を取らなければならないのか、ということだ。

ものごとを深く考えながら学ぶには、書物との対話、そして文章に反応し活性化している自己との対話がなければならない。自分自身が直接経験できることには限りがある。ゆえに、書物を通してさまざまな知識や経験、出来事や視点と出会い、その著者や自分自身との対話を通してそれらを吸収・消化し、自分の人生に活かすことになる。

人と対話している際には、そのように書物や自分自身の世界に沈潜^{ちんぜん}し、思考を深めることはできないだろう。

(榎本博明『教育現場は困ってる 薄っぺらな大人をつくる実学志向』平凡社 2020年)

設問 2 次の文章を読み、要点をまとめたうえで、境界知能や軽度知的障害の子どもたちの困っているサインに対して、教師として必要な支援や配慮について、あなたの考えを述べなさい(600字以上800字以内・横書き)。

境界知能や軽度知的障害だと、学校の先生や親でも気づかないケースが多々あります。統計上は、境界知能は人口の14%、35人学級であればクラスに5人くらいはいる計算です。困っている子どもの人数は想像以上に多いにもかかわらず、です。

家庭では、わが子とはいえ、特に家庭で親御さんが気づくのはなかなか難しいことです。自分の子ばかり見ていると比較対象がなく、どうしてもわが子を基準に考えてしまいがちです。きょうだいができてから気づく場合もありますが、1人目だとなかなかわからないかもしれません。また、3歳児健診や5歳児健診で、わが子の遅れを訴えても「経過観察」とされるケースもあります。

集団の中の一人として子どもを見ている学校のベテランの先生であれば、知的障害に気づくこともありますが、境界知能となると概して難しく「この子はなんかほかの子と違うな」という違和感を覚えながらも、特別な支援にまではつながらないケースもあります。

2019年からは教職課程に「特別支援教育」に関する科目が必修化されました。ただし、授業で知的障害の概要を教わっても、現実に境界知能や軽度知的障害の子どもに接する機会があるとは限りません。そういう子どもたちが、実際にどのような言動をとるのか、それがどういう症状の表れなのか、というところまでは具体的に学べる機会がなかなかないのです。ですから、境界知能や軽度知的障害の子どもがクラスにいたとしても、先生方が見過ごしてしまうこともあるでしょう。

それは学校の先生に限らず、私たち医師にも言えることです。医学部では知的障害の定義的なことについては学びますが、実際に境界知能や軽度知的障害の子どもを前にしても、実際に接したことがなければわかりません。そういった子どもたちは見た目ではほとんど区別がつかまず、普段の生活の様子もほとんど健常児と変わらない子もいます。

では、そういうお子さんたちを見過ごさないためには、どうしたらいいのでしょ

うか？それには、まずは目の前の子どもの状況を正しく理解することから始めるしかありません。境界知能や軽度知的障害の子どもたちの困りごとは、勉強が苦手という学習面だけにとどまりません。普段の生活の中で、いろいろと困っているサインがあるはずです。例えば、

- ・友達との会話についていけない
 - ・相手の気持ちが想像できずにトラブルになる
 - ・感情をコントロールするのが苦手。キレやすい
 - ・約束を忘れてしまう。忘れ物が多い
 - ・先生の話听不懂
 - ・手先を上手に動かせない
 - ・体をうまく動かせない
- ……

そんなサインを観察し、困っている状況やその背景をひとつずつ理解していくことです。

そのためには、常に子どもの目線に落として、何に困っているのかを見ることです。子ども目線に立って、困っていることを考えると、必要な支援が見えてきます。

もうひとつ大事なことは、子どもの話をしっかり聞くことです。子ども相手に限らず、人は、聞いているようでいて相手の話を聞き流してしまうものです。特に子ども相手ですと、説明がつたなかったり要領を得なかったりして、「それって、こういうこと？」などとい口をはさんでしまいがちです。

さらに「あなたにも問題があるんじゃないの？」などと否定する発言をしてしまったら、子どもは心を固く閉ざしてしまいます。子どもにしてみれば、親や先生からの意見が欲しいわけではなく、ただ話を聞いて、自分のことを受け入れてもらいたい一心なのです。ですから、子どもの目を見て、しっかり相づちを打ちながら、話に耳を傾けることが大切です。

(宮口幸治『境界知能の子どもたち「IQ70以上85未満」の生きづらさ』SBクリエイティブ 2023年 一部改変)

問 題 H

次の設問1、設問2の両方に答えなさい。

なお、解答にあたっては、設問ごとに一枚ずつ解答用紙を用い、該当する設問番号を○で囲むこと。

設問1 次の文章を読み、あとの問に答えなさい。

先生たちの話によると、最近の子どもたちは先生から叱られても素直に謝ろうとしないという。たとえ休み時間に暴れていて不注意で窓ガラスを割って先生からお説教をされても、本人からの謝罪の言葉はなかなか出てこないようだ。彼らはしばしば「自分だけが悪いんじゃない。〇〇が自分にちょっかいを出したから暴れたのだ、自分だけを責めるのは筋違いだ」と主張する。これはかつての子どもたちとは大きな違いである。

今の子どもたちは、弱者と見なされやすい「叱られる立場」になることをひどく恐れているようにも見える。一度、自分の非を認めてしまうと、その後一貫して弱者の立場に立たねばならない、と考えているのかもしれない。謝ろうとしなくなったのは、先生を^{おそ}畏れたり、敬意を払ったりすることが少なくなったことにも関係している。

これは人間誰もが平等であるという考えが過剰に浸透したためかもしれない。その場その場での役割や地位というものが機能せず、あらゆる場面で誰もが同じ地平に並んでいると考えているのかもしれない。しかし、教育という場面で教育者と被教育者の間には一線が引かれなければ教育は成立しがたいだろう。

近年学校では、子どもの暴力あるいは窃盗、飲酒といったことに対する先生の忠告や叱責さえも通じにくくなっている感があるが、それは親の態度に起因する場合も少なくない。ある高校で、ある生徒の喫煙が発覚し、担任の先生から警告を受け、次に彼は学校長からの訓戒を両親と共に受けることになった。ところが、その段階になって親が「子どもに確認したが、自分の子どもはやってないと言う。校長

先生からの訓戒は受ける必要がない」と言ってきた。そして子どもも、そのときになりこれまでの自分の言動を翻し、「自分はやってない」と主張し始めた。複数の目撃者が存在しており、事実が明らかなはずであるが、親子が頑として訓戒を受けるのを拒み、結局不問に付されることになったようだ。

このような話は、最近よく耳にする。子どもというよりも、親が率先して学校に謝罪することを強く拒否するのである。親にとって子どもに謝罪させるということは、子どもを「敗者にさせる」ことを意味する。近年では親のほうが、たとえ子どもが社会規範を破っても子どもの責にせず、それを強引に突破していこうという姿勢が見られる。ジコチュウが高じたという見方もあるが、昔のように学級仲間や先生のような他者にもっと気を遣う雰囲気があればこのようなことにはならないだろう。また、さまざまな社会的要因によって、子も親も良心そのものが弱体化してきているとも言える。

「謝らない」ということは、たとえ相手に悪いことをしたという意識があっても頭を下げない、という場合も想定できる。それは先にも述べたように、謝ることがこれから先、相手とつきあう上で不利になるのではないかという計算が働くためかもしれない。だとすれば、逆に謝る場合にも、謝っておく方が先々有利に働くからという計算の上だという推論も成り立つ。謝らない方がよいと考えるような社会は、さまざまな事柄が契約で決められる個人主義的な文化が想定され、先に謝る方がよいと考えるような社会は、さまざまな事柄が協力によって成り立つ集団主義的な文化が想定される。その点では、集団主義的な文化であった日本も、個人主義的な文化が優勢な社会にすでに移行してしまったのかもしれない。

さらに「謝らない」というのは、謝るという社会的スキルが育っていないために、本当は謝りたいのに社会的スキルが未熟でどう表現してよいかわからず、逆のかたちで衝動的、攻撃的な行動に出てしまうのではないかということも考えられる。

(速水敏彦『他人を見下す若者たち』講談社 2006年)

問 最近の子どもや親が謝らないことについての著者の考えを要約したうえで、「謝る」ことについて、あなたの考えを800字以内(横書き)で述べなさい。

設問 2 次の文章を読み、あとの問に答えなさい。

たとえ画像で見ても、猫がかわいいのはわかります。

マウスをかちかち動かせば、黒猫、しま猫、三毛猫、アビシニアンやロシアンブルー、名前も知らないような珍しい猫も、たちどころに画面にあらわれます。愛らしい姿を目にするのは、楽しいことです。

それでも画面では、猫の和毛^{にこげ}、やわらかな手ざわり、しっぽの感触まではわかりません。呼吸で湿ったちいさな鼻、機敏に動く耳が光に透けるさま、肉球のすべすべも伝わってきません。だいたい、画面の猫はじゃれついてきたりはしないでしよう。

便利さであらゆることを省略した僕たちは、このところ「ふれる」という行為から、どんどん遠ざかっている気がしてならないのです。

だから僕は、折にふれて人と握手をします。

手ざわり、血の巡っている感触、「生きていること」を自分の肌で感じ取る行為を、決して忘れたくはないから。

さわるといふ、生き物として欠かせない営みを、省略なんてしたくないから。

会った人全員というわけではありませんが、たとえば、たまにしか会えない人と握手をする。初対面だけれど、とても良い話ができたと人に、「今日はどうもありがとう」の言葉とともに、握手をする。

大変なプロジェクトを始めるというときも、最初の打ち合わせのあとにみんなで握手をします。

「よし、これからが大変だけれど、握手しよう」

そして、おのおのの担当や役割のなかでみんなが苦勞し、その仕事が終わったときも、みんなで握手。

「やっと終わったな、握手しよう」

こうすると、自分の中での始まりも終わりも、仕事の成果がどのような形で残るかも、確実に変わってくるのです。

握手をすると、その人の肌の感じが、記憶のなかに残ります。

さらさらの手のひら。しっとりした手のひら。かさかさの手のひら。

やわらかな指。力強い指。しなやかな指。

これまで出会った人、かかわった人はたくさんいますが、僕はそれぞれの握手の感触を思い出すことができます。そうやってたしかな実感を積み重ねていけば、自分の中の何かが満たされるとつくづく思うのです。

テクスチャー(texture)という言葉は、ものの質感や手ざわりといった意味で使われていますが、英和辞典で引くと「本質」という意味もあるようです。

握手とは、相手のテクスチャーを知る最良の方法ではないでしょうか。

握手に限らず、自分にとって興味があるものには、直接ふれましょう。

場所でも、動物でも、作品でも、どんどん出かけていって、自分の目で見て、自分の耳で聞き、自分の肌でテクスチャーを感じ取りましょう。

(松浦弥太郎『あたらしいあたりまえ。暮らしのなかの工夫と発見ノート』PHP 研究所 2012年)

問 「さわること」についての著者の考えを 300 字以内(横書き)で述べなさい。そのうえで、「さわること」について、あなたの考えを 500 字以内(横書き)で述べなさい。

問 題 I

次の文章を読み、あとの問1と問2に答えなさい。

なお、解答用紙は問ごとに1枚とし、横書きで解答すること。また、解答する前に該当する問番号を○で囲むこと。

「批判」を忌避する風潮

言い淀む時間を恐れず、話し手と聞き手がともに言葉を探し、言葉を待つことができる場合は、私たちにとって必要だが、しかし、なかなか実現されない貴重な場だ。それゆえ哲学対話や哲学カフェでは、そのような場を意識してつくり出すために、相手の発言を途中で遮る行為や、発言の内容を評価したり否定したりする行為を制限するルールを設定する場合が多い。

ただし、あらゆる対話にそのようなルールを設定すべき、というわけではない。たとえば、相手の話が重要なポイントに差し掛かったり、逆に話が本筋から脱線しつつあるときなどに、そこでいったん話を止めて整理することが有効な場合もあるし、内容に対する的確な批判が対話をより豊かなものにする場合もある。

四年前の2017年6月23日、参議院議員の今井絵理子^{いまい えりこ}さんがSNSに、「批判なき選挙、批判なき政治」というスローガンを掲げた投稿を行い、物議を醸す事態となったのはまだ記憶に新しい。

文字通りの意味での「批判なき政治」とは、市民が政府に異を唱えることを許さない全体主義国家の専制政治のようなものだが、おそらく今井さんはそうした意味でこの言葉を用いたのではないだろう。多くの人がすでに指摘しているように、この場合の「批判」は、相手への攻撃や激しい非難といったものを意味していたのだろう。

もしそうであれば、「批判」に対するそのような受けとめ方は、今井さんだけでなく、比較的多くの人々にいま共通していると言えそうだ。たとえば、誰かの行為や考え方などを明らかに批判しているときにも、「正しくない」とか「間違っ

いる」、「よくない」などと言うことが避けられ、「違和感がある」とか「モヤモヤする」、「モヤる」といった言葉が用いられているケースをよく目にする。つまり、「私は誰かや何かを批判しているのではなく、単に違和感やモヤモヤを表明しているだけなのだ」というポーズをとることによって、攻撃ないし非難の色合いをぼやかそうとするケースだ。

同調の空気の中で攻撃や非難と化す「批判」

「批判」にあたる欧語、たとえばドイツ語の *Kritik* や英語の *criticism* は、古代ギリシア語の「クリネイン(ふるいにかける、分ける、裁判する)」や、ラテン語の *cernere, cret-*(区別する、選り分ける)に由来し、否定的な批判だけではなく、事柄を整理して批評することや評論することといった意味も保持している(シブリー 英語語源辞典、独和大辞典 第二版)。

たとえば、哲学者カント(1724—1804)の主著のタイトルである『純粹理性批判 (*Kritik der reinen Vernunft*)』は、理能力のある種の限界をよく吟味して画定する、といった意味であって、「批判」ということで単純な攻撃や非難といったものを指しているわけではない。また、日本語の「批判」も元々は、批評して判断することや、物事を判定・評価すること、良し悪しや可否について論ずることなどを意味していた(日本国語大辞典 第二版)。

しかし、いつの頃からか、「批判」がこの国で常に否定的なニュアンスを帯びるようになったのも確かだ。この言葉をめぐる現在の状況は、その傾向がさらに強まり、極端になった結果だとも解釈できる。

日本の社会は同調圧力が強く、空気を読むことが推奨される風潮が強い、とはよく指摘されるところだが、確かに、批判的検討が必要な場面でも、相互的な「甘え」や「お約束」がその場のコミュニケーションを覆ってしまうケースがあまりに多い。和を少しでも乱す言葉——批判(批評、吟味)的な要素のある言葉——に皆が敏感になり、その場のノリに合わない言葉を発しづらくなるケースだ。(哲学対話や哲学カフェは、そのような状況を避けて、まずもって皆が自分自身の考えを自由に発言できる場をつくる営みだと言える。言葉に対する批判は、その種の間があってはじめて有効なものだ。)

まして、そうした同調の空気が支配するケースでは、相手の主張に対して明確に否定的な意見や疑問を向けることは強く^{はばか}憚られるようになる。言うなれば、互いにならずき合う同調的な言葉の空間と、その空間全体に向けられる容赦のない厳しい言葉、その中間領域が存在しなくなるのだ。この種の状況がコミュニケーションの多くを占めてしまえば、「批判」の言葉はますます^{とげとげ}刺々しく、敵意をもったものとしてのみ機能するようになる。「批判」が相手への攻撃として捉えられがちな現状には、以上のような背景があるのではないだろうか。

「炎上」という言葉ですべてを塗り潰す前に

同調と攻撃の間の中間領域が確保されにくく、「批判」という言葉が本来含んでいた「内容の吟味」、「物事に対する批評や判断」、「良し悪しや可否をめぐる議論と評価」といったものがおろそかになりがちな現状は、「炎上」という言葉の現在の用法にも通じているように思われる。

「炎上」はいま、各種のメディアで発信された誰か(特に有名人や公人)の言動に対して、ネット上で非難や誹謗中傷が殺到することを指す言葉ともなっている。問題は、当該の言動が筋の通ったものや正当なものであろうとも、逆に、筋の通らないものや不当なものであろうとも、どれも等し^し並みに「炎上」と呼ばれる、ということだ。ある差別を告発する勇気ある発言をターゲットに、差別主義者たちが罵詈雑言を集中させることも「炎上」と呼ばれるし、とても看過できない酷い差別発言に対して、その問題を指摘する真っ当な声が多く寄せられることも、同様に「炎上」と呼ばれる。そして、^{何であれ}炎上してフォロワーが増えて良かった、チャンネルの登録者数やオンラインサロンの会員が増えて良かった、ということも平然と言われたりする。そこでは、火の手の大きさや、それに伴う熱量の多さが、物事の真偽や正否や善悪に取って代わってしまっている。

マスメディアで頻繁に用いられている「賛否の声が上がっている」という類いの常套句も、問題になっている事柄の内容をさしあたり度外視して、熱量の上昇のみに言及できる便利な言葉だ。どちらかの道理に明らかに分がある場合にも、また、賛否どちらかの声の方が圧倒的に優勢である場合にも、「賛否の声が……」と表現しておけば、旗色を鮮明にせず済むし、自分の言葉に責任をもつ必要もなくな

る、というわけだ。

「炎上している」とか「賛否の声が上がっている」といった言葉によって物事を
^(a)ひとまとめにしてしまうのではなく、具体的な内容を「批判」する行為が、メディアでもそれ以外の場でも、もっと広範になされる必要がある。そして繰り返すならば、それは必ずしも否定的な行為だとは限らない。賛意を示すのであれ、あるいは難点を指摘するのであれ、人々がともに問題を整理し、吟味し、理解を深め合っている場こそ、本来の意味で「批判」が行われている、建設的な議論の場なのである。

批判を実践するために必要なこと

とはいえ、非難や攻撃とは違って、批判は決して簡単な行為ではなく、私自身も日々試行錯誤しているというのが実情だ。どうすれば的を射た批判を展開できるのかという以前に、相手との人間関係がネックになることも多い。というのも、批判をすれば、多少なりとも相手の気分を害したり傷つけたりすることは避けられないからである。だとすれば、批判は具体的にどう行うべきだろうか。

^(b)批判する際には言い方に気をつける、というのはシンプルだが、しかし、まずもって重要なポイントだろう。たとえ有益な内容の指摘であっても、不必要にきつい言葉や口調で語られては、感情的にとっても受け入れられなくなる。

また、内容という面でまずい批判の典型は、相手の言葉尻だけを捕らえて自分の土俵(自分の専門分野、自分の経験など)に引きずり込み、その土俵上で相手を説き伏せる、というものだ。たとえば、「あなたはいま「無意識に……」と仰ったが、認知科学的には「無意識」とはこれこれこういうものであるから、「無意識」の問題として捉えるのは不適當だ」という風にして切り捨てるだけでは、相手がひどく気分を害するのも当然だ。そして何より、こうしたやりとりでは、問題に対して互いに理解を深め合うことも、別の見方を知ったり新しい見方を生み出したりすることも難しい。

逆に言えば、重要なのは相手の表現を尊重するということだ。具体的には、相手の言葉を十分なかたちで拾い上げ、それがどのような脈絡の下で発せられたのかをきちんと踏まえたうえで応答する、ということが必要だろう。批判を受ける側も、

自分の言わんとすることをちゃんと聞いてもらい、それをよく理解してもらったうえで、納得できる問題点を指摘されるのであれば、苦い思いをしたり、多少傷つく部分はあるとしても、感謝する部分の方が多いだろう。(これは実際、私が学術的な論文を書いたり発表を行ったりした際に、さまざまな批判を受ける経験を重ねる中で実感していることでもある。)

また、批判を行う側にとっても、相手の言葉によく耳を傾け、それをよく理解しようと努めることは、自分には見えていないものの見方や馴染みのない考え方に触れ、学ぶ機会になる。そしてそれは、問題に対する理解を深め、解決の道を探る大事な手掛かりになりうるのである。

批判は、相手を言い負かす攻撃の類いではない。繰り返すなら、批判は相手とともに問題を整理し、吟味し、理解を深め合うために行われるべきものだ。それゆえ、批判は、相手に真っ向から向き合うというよりも、言うなれば、お互いに少し斜めを向き、同じものを見つめ、そのものの様子や意味について語り合う、というイメージで捉える方が適当だろう。

そして、そのような場が成り立つための大前提として、私たちは自分の言葉に責任をもたなければならない。私たちが臆面もなく、「さっきの言葉はそういう意味で言ったんじゃない」といった言い抜けを繰り返したり、口に出した言葉を取り消そうとしたりするのであれば、〈相手が発した言葉を真面目に受けとめ、よく理解しようとする〉という営み自体が不可能になってしまうからだ。

(古田徹也『いつもの言葉を哲学する』朝日新聞出版、2021年より抜粋 一部改変)

問 1 下線部(a)のように筆者が主張している理由を本文に基づいて 400 字以内でまとめなさい。

問 2 下線部(b)について、筆者の考えを踏まえながら、批判をどのように行うべきかあなたの考えを 800 字以内で論じなさい。

問題 J

設問一、設問二の両方に答えなさい。

なお、解答にあたっては、各設問の問ごとに解答用紙を分けて一枚ずつ用いなさい。解答する前に、該当する設問及び問の番号を○で囲むこと。

設問一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

東京の下町にも、「今日はA君は来ないよ」という言いかたがあり、それは「文法的に誤っている」とか「誤った文法」だと言うことがある。前者の「文法的に」というばあいの文法とは、「学校の教科書などの文法にてらして」という意味であるし、後者の「誤った文法」というものは、りくつとしてありえない。「来ない」方言の文法を中心にすえて見れば、「来ない」方言の文法は誤りということになる。ほんとうは、あらゆる文法は「文法」であるかぎり、それぞれに正しくも誤りもないのである。

言語学は正しいとか誤りとか、あらかじめきまったものさしをもってことばにのぞまない。ちょうど生物学が、カブトムシは正しいがミミズは誤っているなどとは言わないように。それは、ラテン語は正しいがスペイン語はくずれて誤っていると、西洋語には文法が正しくそなわっているが、アジアの言語にはそなわっていないとかといったふうに、自分が慣れた基準でしか他者を見ることのできない、みじめでとらわれた思想から解かれて、やっと手に入れた成果であった。そのことばそのものにひそむ固有の文法を引き出すためには、そうするしかないのである。「文法」というものの意味が、いつでもこういうふうに理解されているかどうかという、まだまだそこまではいっていない。

文法の起源は何よりも「正しいことば」を与えるための道具であったから、ひとえに間違ったことば、すなわち非母語を話す人のためにある。自分のことばと寸分ちがわないうことばを書いた文法書など学ぶ理由は何もないのである。自分が自然には使えないことばとか、あるいは知識として特別に学習せねば理解できないことば

を知るためにこそ文法の意味はある。だから、グラムマティカと称される言語、だれも現実に、生れてすぐに話しはじめたのでないことばが文法であり、そういう、古いことば、知らないことばを理解するために文法が不可欠であることは少しもふしぎではない。そもそも、それは文法あつてのことばなのだから。他方、俗語は文法がないから(文法を学ぶ必要がないから)こそ俗語なのである。

だから、ネブリーハが考えついた「俗語の文法」というのは、それ以前の常識にしたがえば、あきらかな形容矛盾か、そうでなければ単なるたとえでしかなかった。しかし、俗語が、異なる言語あるいは異なる方言の話し手にその使用を命じたとき、形容矛盾は形容矛盾でなくなったのである。

母語の文法を学ぶ奇妙さは、したがって偶然のことではなく、ものごとそれ自体の本質に発するものである。誰でも知っている、話しことばの「国文法」が、いかに退屈で生徒の興味を引きにくいかは、たびたび吐露される教師の嘆きがあきらかにしている。その退屈さは「国文法」なるものの本質によっている。それがおもしろいと思われるのは、その古いすがた、方言的すがたや外国語など、要するに何かそれ自身とは異なる、別の体系と比べられたときである。

文法が、ことばの表現の実際にあたって何の力もかしてくれないこと、否、文法を意識することは、かえって自由なことばの表出をそこなうものであることは、とりわけ作家が気がついていた。

谷崎潤一郎は、「文章読本」の文章の上達法の章の冒頭で、まず「文法に囚われないこと」を要件としてあげたくらいである。

第一に申しあげたいのは、

文法的に正確なのが、必ずしも名文ではない、だから、文法に囚われるな。

と云うことでもあります。

これは教条ふうに書いてあるからこうした叙述になっているのだろうが、谷崎はほんとのところは、囚われるに足るような文法は日本語にはないと思っていられないふしがある。それは、日本語には「西洋語にあるようなむずかしい文法と云うものはありません」とか「明確な文法がありません」とかとくり返し述べていることからわかる。

こうした考え方は、しろうとっぽい先入見によるものだとするのが、ちよつとば

かり言語学をのぞいてみた人の感想だろう。なにも日本語にかぎったことではなく、素朴な話し手は、自分が自然に話している母語が、その当人にとって「むずかしい文法」をそなえているなどと思うはずがないと。しかし「たとえばフィン・ウゴル諸語とか、とりわけチュルク系諸語のような比較的単純で規則的な構造の言語」がそうであるように、「明らかに体系が規範を凌駕している」といえるような言語の部類に入る日本語にあつては、たしかに相対的には「むずかしい文法」はいらないのである。ヨーロッパの諸語にくらべれば、日本語は、文法知識の欠如が伝達上重大な結果をもたらすような言語ではない。つまり、日本語はインド・ヨーロッパ諸語にくらべて、より、規則的な言語であるという点で、「むずかしい」「明確な」文法はありませんという谷崎の指摘はまちがつてはいない。

しかしいまは、そのような日本語の構造という特殊性をはなれて、母語についての文法知識がどういふ種類のものであるかということだけに目をむけてみると、それをたとえていえば、ことばはかならず韻文か散文かのいずれかであり、自分がふだん話しているのは散文であると教えられてびつくりする、モリエールの芝居に出てくる人物の感慨に似ている。あるいは、歩行という、自分が無意識のうちにおこなっている運動を分析的に示され、左側の足が前に出ているとき右足は後にあり、左手は後にあつて右手は前にあるものだとか教えられたばかりに歩きにくくなつてしまつた子供の話に似ている。

文法の知識は、それが母語であるばあい、いい文章を書くための助けになるところか、実際の使用をだめにする。なぜか。母語にあつては、文法は話し手の外にあるのではなくて、話し手が内から作つていくものであるからだ。知らない言語や古語の文法は、我々にとつて一方的に受けとるものであり、ただひたすらにその支配に服するためにそれを学ぶ。しかし母語の文法は、話し手みずからがその主人であり、かれはそれを絶え間なく創造し発展させているのである。だから、古い規範からみて破格だの誤りだのと呼んでいるものは、じつはかれの文法の内的進化にほかならないのである。そういう点からみると、谷崎はまだ、文法の権威に気がねした遠慮ぶかい言いかたにとどまつているのである。

ヨーロッパでは、母語の文法の奇妙な性格は早くから、真にことばの根柢からものを考える思索家たちにとっては茶化しのための恰好な材料であつた。

フリッツ・マウトナーは、「文法の誤りは、文法が発明される以前にはまったく無かった」とおもしろいことを言っている。この人はもともといろいろなおしゃべりを並べたてていて、引用すればきりがなが、その中にはこんなものもある。

ソフォクレスが文法をしくじるといふことがあり得なかつたのは、低地ドイツ語を話す村の少年が、みずからの内のことばの文法に違反することがあり得ないと同様である。ゲーテは文法のヘマをやつたかもしれないが、その母はやらなかつたのである。書かれた文法さえ存在しなければ、文法の誤りはない。

(傍点は田中)

文法が創作をさまたげるのだと、もつと積極的に煽動的に言いきっているのはガストン・パリヌである。

パスカル、ラフォンテーヌ、ボスユエ、ヴォルテールに、あれほどすばらしいフランス語を書けたのは、かれらが文法を勉強する必要がなかつたからです。

文法をたてにとる規範主義に対するこの種の嘲笑は、もつと古くは、ロマンティックの思想と手をたずさえていた。ちなみにヤーコブ・グリムの次のような生き生きとした思想をおもい起してみよう。

六〇〇年前には、普通の農民はだれでも、ドイツ語の完全さと自由とを知っていた。つまり、今日の最良の言語教師が想像もできないようなドイツ語を日々用いていたのである。

言語学あるいは言語学者が、ことばに文法があると考えるときの文法は、その言語が提供している表現の可能性であると考え。つまり何が言い得るか、表現のためにどのような自由が提供されているかというふうを考える。いわゆる文法的な誤りは、その時点では誤りであるとしても、いずれは誤りではなくなるかもしれない(誤りを作るのは規範であるからだ)。なぜか、誤りは、もしそれが誤りであっても理解できるならば、体系の可能性のなかであらわれた誤りであるからだ。誤りだとわかるのは、それが理解できるといふことの何よりの証拠である。

しかし、国家が学校を作つてそこで教えるようになった文法は禁止の体系である。文法は法典であり、規則であり、そこに指定された以外の可能性をぬりつぶしていく言語警察制度を自らのなかに作りあげる作業である。したがつて、このような精神のはたらきが、創作のいとなみとは真反対のところにあることはすぐに理解

できる。アンドレ・マルチネは、「文法家どもがことばを殺す」というはげしい題名の論文を書いている。

(田中克彦『ことばと国家』岩波書店、一九八一年、一部改変)

問一 傍線部について、なぜ筆者はこのように考えるのか、その理由を文章の内容をふまえて説明しなさい。(一〇〇字以上一五〇字以内・縦書き)

問二 まず筆者の考えについて整理し、次にその考えに対して論点を設定し、あな
たの考えを論じなさい。(五〇〇字程度・縦書き)

設問二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

標準的な見方によれば、中国やイスラム世界の状況はこれ以上ありえないほどヨーロッパと違っていて、オートクラシー(独裁)が経済発展を窒息させたときとされている。産業革命が中国でも中東でもなくヨーロッパで起こったという事実は、この主張を裏付ける最有力証拠となっていて、これに異論を唱えるのは難しい。しかし時代をもっとさかのほれば、この路線での推論ではすぐに問題にぶち当たってしまう。長いスパンで見た歴史の大半では、中国やイスラム世界のほうが経済発展で先を行っていた。どうすればそれが可能だったのだろう。

(中略)

地域をまたいで経済発展の結果を比較するときには、どのようなタイプの成長が起こったのかも問う必要がある。オートクラシーは投資の増加を強制する能力があることから、一時的にはデモクラシーより速く成長できるとする考えがある。経済学者はソヴィエト連邦についてこの現象を証明していて、当初は莫大げんたいな投資によって急速な成長を生み出したが、それを維持することはできなかったとしている。ほかには、世界の最先端テクノロジーから大きく遅れて始まったオートクラシーは急速に成長できるが、オートクラシーはイノベーションを好まないため、先端に近くにつれて停滞するようになるとする経済学者もいる。

実態を見ると、中国やアッバース朝カリフ国が早い時期に経済発展に成功したのはソヴィエト型の成長によるものではなかった。成功の理由のひとつは、こうした政体では、広大な地理的領域にまたがる統一的な統治がイノベーションに拍車を掛けたことだろう。共通の権威の下にあって慣行も政策も共通している時代には、さまざまなアイデアが自由に流れていくものだ。

まずは、初期イスラム世界での農業革命について古典的なテキストを著したアンダールー・ワトソンのこんな記述を考えてみよう。

われわれの問いかけから浮かび上がってくるのは、ひとつの広大な統一地域である。その地域は3世紀ないし4世紀にわたって——場所によってはさらに長く——新しいものすべてに対して異常なほど受容的だった。そしてまた、異常なほ

どに新規性を拡散させる力もあった。それは最初の移転をもたらして、ある地域にある要素を導入する力と、二次的な拡散を遂行して、物珍しさを当たり前に変えてしまう力の両方である。

このような場所で、オートクラシーがイノベーションを窒息させたとはとても思えない。とはいえ、それが永遠に続かなかったことは認めなければならない。後年、オスマン帝国は新しい重要なテクノロジーの拡散に抵抗するようになる。経済史家は広範な証拠を提出して、のちの中東国家の制度や慣行、政策が、ときに経済変化を妨げてきたことを示している。

次に、広大な領域を支配するオートクラシーの君主が、知識や農業実践の拡散を自ら奨励していたことを考えてみよう。1012年、揚子江をはじめとする中国各地で深刻な早魃かんぱつがあった。帝国の領土が広大なうえ、近隣の王国とのつながりもあって、北宋の真宗帝は、早魃に強くて成熟の早いコメの品種を知ることができた。帝は農民がすでにそのコメの栽培を始めていた福建路に使節を送り、早魃に襲われた地域に配るために3万石の種粳たねもみを手に入れた。政府はさらに、新しい種粳の栽培方法を農民に指導した。新品種のコメは、原産地である中央ヴェトナムのチャンパ王国にちなんで占城稻チャンベンと呼ばれるようになった。コメの専門家のなかには、この重要性を現代のグリーン革命になぞらえる者もいるほどだ。

イノベーションを推進する帝国という中国のこの姿は農業に限られたものではなかった。木版印刷や活版印刷についても同じ結論を引き出すことができる。宋王朝は政治思想に関しては出版を制限していたが、技術的科学的マニュアルの拡大は国家として積極的に奨励していた。これは今日の中国と非常に似ている。製鉄やテクノロジーについても同じことが言えるだろう。イギリスが製鉄で宋王朝の水準に到達するのはようやく17世紀になってからのことだ。当時の中国は水上輸送にも大きな技術的發展があったほか、市場構造も改善されている。

中国と中東が最初は技術面で先行していたとしても、ではその政治制度に関して、のちに産業革命時のヨーロッパで起こるような超急速なイノベーションを妨げるようなものがあったかどうかは問わなければならない。産業革命が近代科学の産物だとすれば、話は有名な「ニーダムの問い」に行き着くことになる。イギリスの

科学者で博識家のジョゼフ・ニーダムはこう問いかけている。

なぜ近代科学が、すなわち自然に坎する仮説を数理化するということが、それには進んだ技術が絡みあうものだったのに、ガリレオの時代の西欧においてのみで流星のように出現したのか。

このニーダムの問いに対して、占城稲のエピソードが示すように、中国の制度でも経験的な学習とおしたイノベーションは可能だったが、最終的に西洋の発展を決定づけたような実験的な学習に基づく科学の発展には不利だったのではないかとする研究者もいる。経済学者のジャスティン・リンは、経験的学習は大規模な人口があるときに有利だと主張しているので、いま挙げた主張を前提にすれば、アッパス朝カリフ国についても同じ結論を引き出しただろう。しかしリンは、中国が実験的学習に不利だった理由として、もしガリレオが中国に暮らしていたら科学者ではなく官僚になっていただろう、と主張している。これは興味深い考えではあるが、ではなぜ官僚機構の内部では実験に不利になるのかという疑問を回避してしまっている。初期のインターネットの発達は、結局のところ、アメリカ合衆国の政府機関である国防高等研究計画局の支援があつてのことだった。また、宋王朝の中国で起こった技術的イノベーションの多くは官僚の仕事から直接派生したものだ。ここでの秀逸な例は蘇頌だろう。多くの異なる科学分野で名高い学者で、官僚機構のなかでも最高位の丞相にまで上り詰めている。

このテーマでも初期の貢献のひとつである1946年の著書で、ジョゼフ・ニーダムはリンの説に替わる主張を提出している——おそらく実験的多様性の科学は根本のところデモクラシーの事業なのだろう、それゆえデモクラシーの環境で最も盛んになるのだ、と。ただし、ここでニーダムが用いている「デモクラシー」ということばには、制度的なデモクラシーだけでなく啓蒙思想も含まれている。

ヨーロッパの従来の成長物語では、オートクラシーの下では民衆は進んで投資をしたりイノベーションに携わろうとしたりしない、それはこの政治システムが適切な財産保護を提供しないからで、ヨーロッパでは代議制議会の登場がこの問題を解決したと言われている。では、どうやって中国は議会なしで成長を達成したのだら

う。

宋王朝は実は中央集権化と権力の私物化が強まった時代で、行政による皇帝へのチェックは縮小していた。中国の先行王朝である唐の下では、皇帝はオートクラシーの君主として支配したものの、有力家系の貴族階級と争いつつ、依存もしなければならなかった。唐の時代に科挙の制度が採用されたことで、王朝末期に向けて有力な氏族は弱体化し、同胞による戦争も収まっていった。氏族政治から自由になるなかで、宋王朝の初めの何代かの皇帝は、科挙を通じて選ばれた官僚に依存するようになった。また宋の皇帝は、役人が中間組織ではなく皇帝に直接責任を負うようなシステムも確立した。

宋の歴代皇帝は商業を支援する政策を追求したが、彼らが実施した行政の中央集権化は、将来に向けて困難の種を播いたのかもしれない。明王朝の初代皇帝となった朱元璋の下で、中国は市場経済を弱体化させる政策をいくつか追求した。その第一は紙幣「大明寶鈔^{ほうしやう}」の過剰発行で、生産者はこれを交換媒体として受け入れるのを嫌がった。

明は水上輸送への投資も疎かにしていて、とくに宋の首都だった開封の周辺地域ではそれが最も明らかだった。やがて首都は北方の北京に移されたが、当時の北京はまだ交易ネットワークに深く埋め込まれていなかった。北京から中国南部への主要リンクは大運河を経由したのだが、明の皇帝はその運河を軍の直接管理下に置き、民間船舶の利用を制限してしまった。

最後に、明は国の北部および西部に屯田兵の制度を確立した。人員は非自発的な移住によって充てられた。ある推定によれば、1393年頃には中国人口の15パーセントがこのやり方で移住させられていたという。これは、近代的な輸送手段のない社会としては驚くべき数字で、中国国家の強制力がきわめて高かったことを証言している。このような強制移住が経済発展に有益だったとはとても思われえない。こうした決定の核心には軍事的・戦略的な配慮があった。

(中略)

アッパース朝カリフ国(750-1258年)の中東でも、宋王朝の中国で経済発展に有利に働いたのと同じ要因が作用した。ここでもオートクラシーの指導者が、とくに初期の頃に学習とイノベーションを推進したことがわかっている。中国との

違ひは、アッバース朝のオートクラシー支配が実際にはかなり不安定だったことで、リソースが軍事紛争に流れてしまい、とくにイラクの経済を維持していた灌漑システムに投資が回らなかった。中国についての検討からは、中央集権化されたオートクラシーでの経済発展に関してひとつの問題が見えてきた。それは強力な指導者は発展を推進できるが、それをあつというまに弱体化させる手段をも有しているということだった。アッバース朝では、オートクラシーの第二の弱点を見ることになる。それは指導者選びの問題だ。

アッバース朝のカリフは広大な統一帝国を支配していたので、農業のイノベーションや実践が幅広く拡散した。同じことは市場の組織システムにも当てはまり、カリフ国の中心であるバグダードでの慣行が各州でも採用された。ほかにカリフ国で経済発展に有利に働いた特徴としては、アッバース朝の歴代カリフが学問を推奨し、翻訳運動に資金援助したことが挙げられる。おかげで、あらゆる科学文献と関連テクストがアラビア語で利用できるようになった。

しかし最終的には、政治の不安定がアッバース朝の当初の経済的成功を台無しにってしまった。

(中略)

支配者の平均統治期間がわずか8年であることから、前期アッバース朝の時代は飛び抜けて不安定だったことがわかる。一部の研究者は、これを長子相続制に基づく継承ルールがなかったため、あるいは、ヨーロッパに存在したような王を拘束する制度がなかったためだとしている。ほかに、一夫多妻制の影響を強調する説もある(複数の妻がいれば息子も複数になるので争いになりやすい)。こうした主張にはそれなりの真実があるのだろうが、宋王朝の中国もサーサーン朝帝国も、そして後期アッバース朝もすべて一夫多妻制だったが、支配者は長くその地位にとどまっている。初期アッバース朝の時代があればほど不安定だった正確な理由はまだ完全には定まっていない。ここでのごく一般的なポイントとしては、オートクラシーはとくにこのリスクの影響を受けやすい、ということではよいだろう。

アッバース朝の不安定さは経済発展にネガティブな影響を与えた。イラク南部はカリフ国の主要な農業生産地であり歳入源だった。イラクの農業は灌漑システムに依存していて、これには継続的な投資が必要だったのだが、アッバース朝は、この

システムをサーサーン朝から継承したままにしていた。政治的混乱と不安定によって、農村地域の生産を維持するのに必要なステップが無視されたままになった。灌漑に投資する代わりに、アッバース朝のカリフは莫大な資源を軍事に投入して領土の支配を維持しようとした。しかしそれは、最終的にさらなる不安定の原因を生み出すことになった。常備軍の財政需要には弾力性がないのに対して、農業課税からの歳入はたびたび変動した。こうした状況下では、公的な借り入れの形態を發展させるのが理想だったのだろうが、そうはならなかった。945年以後もアッバース朝カリフによる支配は続いたが、それはほぼ儀礼的な存在になっていた。

(デイヴィッド・スタサヴェージ『民主主義の人類史 何が独裁と民主を分けるのか?』みすず書房、二〇二三年、一部改変)

問 中国と中東での経済発展の変遷における政治的・社会的背景について、それぞれの経済を成長させる可能性と阻害する危険性を対照させながら、まとめなさい。(五〇〇字以上七〇〇字以内・縦書き)